社会科教師の専門性形成に「考古学」を活かす
—愛知県埋蔵文化財調査センターとの連携を通して—

白井　克尚

"Archaeology" is Utilized for a Social Studies Teacher's Speciality Formation
—Cooperation with Investigation Center of the Buried Cultural Property of Aichi Prefecture—

Katsuhisa SHIRAI

1．　問題の所在

本研究の目的は,社会科教師の「専門性」の形成に向けて,「考古学」を活用した教師教育のプログラム開発を行うことである。1990年代以降,教職の専門性に関する議論が活発に行われてきている。本稿で検討する社会科教師の「専門性」とは,社会科という教科に固有の単元づくりや授業づくりに関する資質であり,教師の人格全般のレベルまで拡大するものではなく,また教育方法だけに限定されるものでもない。そうした社会科教師の専門性の問題について,坂井俊樹は,社会科学領域と教育領域をどうつなげていくかといった問題とともに検討されなければならないことを言及している(1)。すなわち,社会科という教科教育固有の社会科教師の専門性について考察する場合,社会科教師による社会科学領域への態度が関連づけられなければならないことを指摘するのである。

本稿で検討の対象とするのは,「考古学」の学問領域を活用した社会科教師教育の取り組みである。現在の学校教育においては,埋蔵文化財の普及・啓発活動が求められている。平成19年2月には,文化庁より『埋蔵文化財の保存と活用－地域づくり・ひとづくりをめざす埋蔵文化財保護行政－』についての報告が行われた。この報告では,「埋蔵文化財が学校教育において大きな可能性を秘めた教育的資産であることを踏まえ,各地方公共団体はその成果を教育・学習の中に的確に位置づける必要がある」,「埋蔵文化財専門職員による学校への出前授業,体験学習,資料館・博物館等での学外授業,遺跡見学等の教育活動への組み込みを,これまで以上に広く展開していくことが求められる」,「学校現場との連携も重要である。学校教職員に埋蔵文化財を利用した授業を行うための講座を開催することや体験学習用の教材を作成することや学校教職員との共同作業によって地域の歴史や文化に関する副読本を作成することも有効である(2)」等の提案がなされた。こうした地域に残る「埋蔵文化財」を活用していくためには,社会科教師による「遺跡」や「文化財」に対する深い理解が求められる。地域に根ざした教育実践を展開していくためにも,「考古学」の学問領域は,社会科教師にとって重要な意義を認めることができる。

また,平成20年12月14日に改訂された学習指導要領においても,小学校社会科の指導計画の作成に当たり配慮するべき事柄として,「博物館や郷土資料館等の活用を図るとともに,身近な地域及び国土の遺跡や文化財などの観察や調査を行うようにすること(3)」という視点が示された。これは,小学校社会科の指導に際し,学習者自身による主体的な思考形成や価値判断を重視していこうとする視点である。このような提案を受けて,今後の小学校の社会科教師には,「遺跡」や「文化財」を活用しつつ,子どもたちに地域の歴史の見方・考え方をトータルに育む教育実践が要求されることとなると考えられる。小学校社会科教師には,教材開発のために地域に分け入り,社会科単元づくりや授業づくりを行っていく工夫

が,いっそう求められていくことになるであろう。こうした社会科教師の研究的態度は,「考古学」の学問領域と大きく関わってくると考えられる。

以上のような問題意識に基づき，本稿では,社会科教師の専門性形成に「考古学」を活用した社会科教師教育の取り組みについて検討することを目的とする。分析の対象とするのは,2010年度において,愛知県埋蔵文化財調査センター(4)との連携を通して筆者が取り組んだ社会科教師教育の実践である。本稿を通して成果と課題について論述していきたい。

2．社会科教師の専門性育成に「考古学」を活用するための視点

社会科単元づくりや授業づくりにおいて,博物館の展示見学のカリキュラムに歴史学習を位置づけようとする博学連携の試みは,盛んに行われている。また,「考古学」研究機関である埋蔵文化財センターとの連携を通した熱心な取り組みも報告されている(5)。主としてこうした取り組みは,「勾玉玉作り体験」「土器作り体験」「火起こし体験」「発掘体験」といった模擬的な体験活動を通して,学習者の歴史に対する理解を深めていこうとするものが多い。しかし,これらの体験活動を通して学習者が獲得する歴史認識は,これまでの「考古学」研究の成果によって解釈され,意味を与えられたものと無関係であるとは言い切れない。地域の歴史について，学習者自身が解釈や意味づけを行い,批判的に検討する活動を通して,はじめて当時の歴史的状況を考えることができ,体験の意味を理解することができると考えられる。今後の社会科教育においては,そのような学習者による主体的な解釈を保障する学習プログラムを,いかにして構築していくかが,社会科教師に求められていくことになると考えられる。

そこで,本稿では,解釈型の社会科教師教育のプログラム開発に際し,欧米における「考古学」の考え方を参考にすることにした。欧米では,「考古学」の考え方やプロセスを教育に活かすことや,遺跡・遺物を教材とする「文化財学習」を指した「考古学教育(6)」も盛んであるという。つまり，学習者自身に関わりがある「歴史」について,主体的に「解釈」する可能性を「考古学」に見出そうとする立場から開発・実施されているものであるといえる。中でもイギリスにおいては,「考古学教育」の専門機関であるＣＢＡによって,ナショナルカリキュラム「歴史」に掲げられている５つのキーエレメント（ＫＥ）(7)に基づき,学校教育における「考古学的要素」活用の根拠が見出されている(8)。表１は,そうしたイギリスの「考古学教育」のあり方を参考にしつつ,各ＫＥにおける考古学的要素活用の根拠を,社会科教師の専門性として位置づけたものである。

【表１　社会科教師の専門性としての考古学的要素活用の根拠】(9)

KE	社会科教師における考古学的要素の活用
KE 1	・遺物や出来事を適切な順序に並べることやデータの入手法などは,考古学と関わりがあることについて理解し,活用することができる。 ・博物館などの遺物を年代順に並べることは,異なる物質の物理的状態が時代によってどのように変化したかについて理解するのに理想的であることを理解し,活用することができる。 ・発掘現場などでは,地層の堆積状況年代を知る方法をとっていることについて理解し,活用することができる。

KE2	・ 過去の社会がどのように機能していたか,そして,どうして変化が起きたかについて理解するにあたり,多くの考古学者が関わってきていることを理解し,活用することができる。 ・ 考古学に関する文献を見ることにより,何がなぜ起きたかについては,異なる見方が存在するということを知ることができることを理解し,活用することができる。
KE3	・ 文献史料よりも考古資料の方が,容易に解釈の相違が見えることを理解し,活用することができる。 ・ 博物館の展示,歴史的建造物の内装,廃墟が展示されているものなどを活用することにより,解釈を行う練習となることを理解し,活用することができる。
KE4	・ 歴史的探究に関わる見解は,直接考古学に結びつくことについて理解し,活用することができる。
KE5	・ 直接計画を立て,それらの結果について伝達することは考古学者によって行われていることを理解し,活用することができる。

今後の日本の社会科教育においても,このような学習者による主体的な解釈を保障する学習プログラムを構築していくことが,社会科教師に求められていくことになると考えられる。本稿では,そうした社会科教師の専門性形成に際し,以下の二つの場面における「考古学」の活用を試みた。①教員養成課程における「考古学」の活用,②教員研修における「考古学」の活用,である。つまり,社会科教師の生涯発達の観点からの,「考古学」的要素の活用をめざした教師教育の取り組みであるといえる。

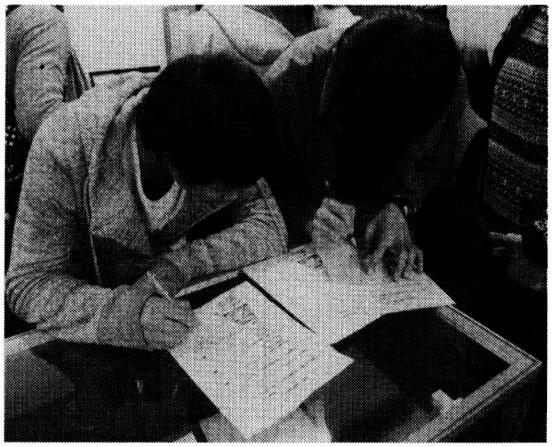
3. 教員養成課程における「考古学」の活用

『埋蔵文化財の保存と活用－地域づくり・ひとづくりをめざす埋蔵文化財保護行政－』の報告では,「大学では,考古学についての教育・研究を行っているところは多いが,埋蔵文化財や文化財の保護に関する教育・研究を行っているところは少ない。大学等の研究・教育機関には,このようなことがらについての配慮や対応も望まれる(10)」といった問題点も指摘されている。2010度,筆者は,愛知教育大学の非常勤講師として教養科目「S2社会科研究AI」を担当した。そのカリキュラム構成は,大学生を擬似的に「考古学者」という立場に立たせ,学習者による主体的な活動が援助される計画となっている(表2)。そこでは,グループ活動や話し合いといった学習者同士でのかかわり合いを通して,レポート作り,博物館の展示作り,遺跡の保存のための活動等を行うことにより,歴史の見方や学び方といった「考古学」のスキルを修得させることをめざしている。また,このカリキュラムは,「考古学」のスキル自体を学ぶことを目的としており,社会科教師としてどのように地域の教材を「活用」するかといった観点だけはなく,資料をどのように「解釈」し,「批判」するか,あるいは「フィールドワーク」をいかに取り入れるかなど,「考古学」的思考力をトレーニングする内容も含まれている。

【表２　教養科目「Ｓ２ 社会科研究 ＡＩ」の内容構成】

	テーマ	サブテーマと主な内容項目	資料
1	社会科歴史学習概論	＊社会科歴史学習とは ●歴史研究と歴史教育 ●考古学者の仕事は探偵に似ている	
2	文化財と市民	＊文化財と自分とのつながりを知る ●発掘調査のイメージについて考える ●考古学者のイメージについて考える	『埋蔵文化財の保存と活用』
3	遺跡と市民	＊遺跡と市民との関わりについて考える ●ビデオ『月の輪古墳』 ●ビデオ『朝日遺跡の風景』	『月の輪古墳』 『朝日遺跡』
4	体験的活動(1)	＊遺物から分かる歴史 ●遺物の見方 ●遺物接合パズル	『土器・ど・キット』
5	体験的活動(2)	＊発掘調査とは？ ●遺構の見方 ●遺構クイズ	『なにわ考古学研究所』ワークシート
6	考古学演習	＊地域の遺跡・体験発掘 ●地域の遺跡の紹介 ●発掘調査の体験	『遺跡紹介パンフレット』
7	地域の歴史の教材化	＊授業の計画・実践 ●遺跡の教育的価値についての話し合い ●体験的学習の場としての地域についての話し合い	『地域に学ぶ社会科教育』
8	現代社会と社会科歴史学習	＊遺跡や文化財の保存活用のあり方について考える ●現代社会の問題としての遺跡保存と活用 ●体験的な歴史学習とその意義	

講義を通してのある学生の感想には，「『社会科』と言われて,自分が想像するのは,暗記ばっかりの,堅苦しいものと思っていたが,今日授業を受けて,社会科は暗記するだけでなく,『体験』することでも多くを学べることを知った。中学では写真と年代をひたすら合わせて覚えていた気がする。でも授業でこうやって実物を手に障り,クイズ形式でやるのは楽しいし,とても良いと思った。これから授業する立場なので参考になった」とあった。このような感想より，教員養成課程における「考古学」の活用が，学生たちの歴史に対する見方・考え方を相対化した成果を確認できる。将来の社会科教師となる学生たちが，そうした「考古学」の魅力に触れたことの意義は大きい。将来，社会科教師として地域の歴史を教材化する際に，本講義を通して体験的に学習した「考古学」研究のスキルが役立つことを願ってい



【写真１・２　愛知教育大学「Ｓ２ 社会科研究 ＡＩ」講義の様子】

４．　現職研修における「考古学」の活用

社会科教師の専門的力量の一つとして,地域教材を活用した社会科単元づくりや授業づくりを行う力量をあげることができる。しかし，各自治体による副読本作成を通して地域教材の開発は実施されてきてはいるが,地域研究を行った経験のある教員の数が減ってきており,社会科単元づくりや授業づくりを行うスキルを学ぶ機会も年々減少している。現在の学校現場は日々多忙であり,教材開発を行うための時間的な制約も多く,組織的で系統的な現職研修を行う機会も少ない。教育センターにおける現職研修も,野外活動としては実施されていない現状もある(11)。

そうした折に,筆者は,出前授業を通して学校現場に赴く機会や,現場の社会科研究会やサークルからの打診を受け,発掘現場での現職研修を担当する機会を頂いた。フィールドワークを通して,野外観察のために必要な見方や引率のコツなどの習得をめざした取り組みである。こうした現職研修における「考古学」の活用について,実践を通じて成果と課題について検討を行った。

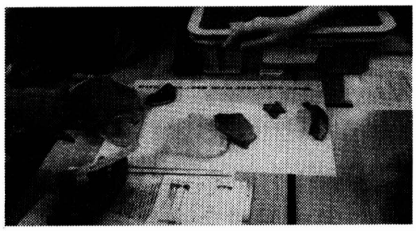
【写真３・４　「考古学」について説明したスライドと遺跡での現職研修の様子】

現職教育における「考古学」を活用した取り組みは,中学生の職場体験学習のための事前研究や,小・中学生に向けの発掘体験のための教材研究などの形で実施された。参加された

先生からは,「社会科の教材として開発したい」といった感想を多く聞くことができた。現職教員の歴史の見方や考え方を相対化するきっかけとなったことを確認することができる。とりわけ,「考古学」が，現場の社会科教師の地域の歴史に対する研究的態度を育んだことは大変意義深い。

また，愛知県埋蔵文化財調査センターは,愛知県内の社会科教師を対象にして,誰にでも利用できる実物教材としての「土器・ど・キット」を現職教育において活用している。愛知県における地域に根ざした社会科教材としては,三河教育研究会社会科部会が作成した『地域に根ざす歴史指導資料集』(1975年）や,『三河の史跡と人物で綴る歴史指導資料集』（1989年）などがある。しかし,教材としては古く,教育現場においても十分活用されているとはいいがたい現状もある。

そこで,愛知県埋蔵文化財調査センターは,愛知県内の遺跡から出土した遺物を集め,「土器・ど・キット」を開発・作製した。これは,「考古学」の基礎となる観察・比較・分類の方法について,「ハンズ・オン」を通して体験的に学ぶことをめざした教材である。時代ごとの土器を並び替える「遺物分類ゲーム」が主な活動となり,土器を触り,土器の硬さや色などをよく見て,「考古学」的思考をはたらかせる必要がある。すなわち,考古学の「知識」ではなくて,ごく基本的な「考え方」「学び方」を身につけるための適当な教材となっている[12]。



【写真５・６　「土器・ど・キット」を用いた社会科授業の様子】

「土器・ど・キット」を使用した学習者の感想には,「土器に初めて触りました。ざらざらしたものやつるつるのものもありました」,「いつも自分の散歩していたところが遺跡だったんだ」というように,「考古学」の模擬的な作業を体験し,「考古学」的な思考力を働かせるとともに,地域の歴史についての関心を深めたものが多くあった。こうした実物教材の優れた点は,学習者自身が,教材を見たり触ったりする中で,教材に対して抱いた疑問から,教材のもつ意味を詳しく調べ,先人たちの知恵や工夫を知ることができるといった点である。歴史教育における実物教材の活用は,授業を活性化させ,学習者の地域の歴史に対する理解を深めるといった点においても,その意義を認めることができる。

こうした地域に根ざした「考古学」の実物教材は,教育現場では,なかなか手に入りにくいといった現状もある。「土器・ど・キット」は,愛知県内の社会科教員であれば,誰にでも手に入り,活用できる教材として開発した経緯がある[13]。「土器・ど・キット」を通して,埋蔵文化財調査センターと学校現場とが結ばれる一つのきっかけとなればと考えている。

５．本研究の成果と課題

本研究の成果は,以下の二点にまとめることができる。

一点目は,教員養成課程における「考古学」の活用を通して，学生たちが,これまでに学

んできた「歴史的事実」を相対化することができた点である。学生たちは,「歴史的事実」とは,教師が伝えるものではなく,学習者自身が「解釈」し,「意味」づけていくものだと捉えるようになった。「考古学」が,地域に残る「遺跡」や「文化財」を理解するための手がかりとなることを理解したようである。地域の歴史に対するそうした研究的態度を身につけていくことは,子どもの主体的な学習活動を促していく社会科教師の資質として重要なものとして捉えられよう。

二点目は,現職教育における「考古学」の活用を通して,現場の社会科教師が自らの教授活動の中で「解釈」し,「意味」を与えている「歴史的事実」を相対化することができた点である。社会科教師は,「考古学」的要素を社会科カリキュラムに位置づけ,子どもの学習過程を組織化していく必要があるだろう。そのことにより,子どもたちは身近な地域への関心や理解を深め,「推理」や「謎解き」といった考古学的な思考力を育むことができると考える。今後も現場の社会科教師には,そのような「考古学」に対する共通認識が求められていくであろう。

また,以上のような社会科教師の専門性形成に「考古学」を活かす取り組みを通して,見出された課題は,「考古学」という学問が,社会科教師にとって豊かに解釈されていないといった現状である。「考古学」は,「謎解き」だと言われる。「考古学」には,調べる楽しさ,難しさがあり,ときには新たな価値の創造へつなげることができる魅力がある。歴史学習における「考古学」の活用は,地域の先人たちの知恵や工夫を知ることにより,歴史のもつ意味を詳しく調べ,現代社会をよりよく理解する上で役に立つ学問領域としての意義を認められる。しかし,現在では,地域の子どもたちが本当に知りたいと思うことのない「考古学」の調査報告書や研究論文が再生産され続けている状況もある。地域に残る遺跡は破壊を前提とされ,「考古学者と市民との意識にはかなりの隔たりやズレがあり,両者は充分にコミュニケーションがとれている状態ではない(14)」との指摘もある。

現在,歴史教育においては,子どもたち自身が,歴史を豊かに「解釈」するための本物の科学としての「考古学」が求められている(15)。「考古学」が,過去の社会の理解を通して,現代社会についての理解を深めるという意味をもち得たとき,社会科教育における「考古学」の存在意義を認めることができるだろう。さらに,学習者の問題関心に基づいた歴史学習を展開していくためには,社会科教師が,自らの教授活動の中で「解釈」し,「意味」を与えている「歴史的事実」に無自覚であってはならない。そのために,今後も「考古学者」と「社会科教師」が積極的に連携していくことが必要だと考える。埋蔵文化財調査センターと学校教育現場との連携が,今後も推進されていくことを願う。

【註】

(1) 坂井俊樹は,小学校社会科教師の専門性について,「とりわけ小学校社会の場合,地図学やフィールド調査法は,直接に授業づくりに結びつき,教師としての専門性が身に付いていく。つまり地理学や歴史学における見方や使用される諸スキルは,小学校の授業での子どもたちの指導でも不可欠であり,地域社会の分析の方法としても有効なのである」と主張し,専門社会科学と関連づけた論及も行っている(坂井俊樹「社会科教育の新たな発展と教師の専門性」東京学芸大学社会科教育学研究室編『小学校社会科教師の専門性育成 改訂版』教育出版,2010年,10頁)。また,日本社会科教育学会研究推進委員会が主催した平成23年度春期研究会は,「社会科授業づくりにおける教師の専門性の育成と力量形成－ライフヒストリーをみすえて－」

のテーマで開催された。

(2) 埋蔵文化財発掘調査体制等の整備充実に関する調査研究委員会『埋蔵文化財の保存と活用（報告）－地域づくり・ひとづくりをめざす埋蔵文化財保護行政－』文化庁, 2007 年（文化庁文化財部記念物課編集『発掘調査のてびき－整理・報告書編－』文化庁文化財部記念物課, 2010 年, 276-287 頁）。

(3) 文部科学省『小学校学習指導要領解説　社会科編』東洋館出版社, 2008 年, 119 頁。

(4) 愛知県埋蔵文化財調査センターは, 愛知県内の埋蔵文化財の調査研究や整理・保存を行い, あわせてその活用や保護思想の普及をはかるために設置された施設であり, 1 埋蔵文化財の調査研究, 2 埋蔵文化財と関係資料の収集・整理・保存, 3 埋蔵文化財と関係資料の収集・整理・保存, 4 埋蔵文化財の活用や保護思想の普及を行っている組織である。

(5) (財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団の「古代から教室へのメッセージ」事業としての出前授業の取り組みや, (財) 群馬県埋蔵文化財調査事業団による体験講座への講師派遣などの取り組みが, その代表的なものとして挙げられる。

(6) 岡村勝行「パブリック考古学最前線(4) 『文化財の保護と活用』とパブリック考古学」考古学研究会『考古学研究』52-2, 206 号, 2005 年, 104 頁。

(7) 平子晶規「イギリスにおける『ナショナルカリキュラム歴史』の動向－新カリキュラムの概要と日本の社会科に与える意義－」愛知教育大学社会科教育学会『探究』第 9 号, 1998 年, 13-25 頁。

(8) 小林大悟「イギリス初等・中等教育における考古学的要素の活用について－ＣＢＡの見解を中心に－」財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『研究紀要』第 17 号, 1999 年, 59-79 頁。

(9) 同前, 67 頁を参照に筆者作成。

(10) 前掲,『埋蔵文化財の保存と活用（報告）－地域づくり・ひとづくりをめざす埋蔵文化財保護行政－』, 287 頁。

(11) 文部科学省初等中等教育局「わかる授業実現のための教員の教科指導力向上プロジェクト」平成 18 年度経費『社会科におけるフィールドワーク指導技術育成プログラムの研究 研究成果報告書』(研究代表者 寺本潔, 2007 年, はじめに)。

(12) 教材の作製に当たり, 以下の Arch. LABO 考古学教育研究室の HP を参考にした。
http://homepage2.nifty.com/cy/

(13) 2012 年度においては,「土器・ど・キット」の貸し出しをした社会科授業の試みも行われている。

(14) 岡村勝行・松田陽「変革期の考古学者(1) 私たちはどこにいるか？」考古学研究会『考古学研究』55-1, 217 号, 2008 年, 82 頁。

(15) 土屋武志『解釈型歴史学習のすすめ－対話を重視した社会科歴史－』梓出版社, 2011 年。

(註) 本稿は, 筆者の 2010 年度における愛知県埋蔵文化財調査センターとの連携を通した取り組みに基づいて, 2011 年度日本社会科教育学会第 61 回大会（於：北海道教育大学）において発表した内容をもとに加筆・修正を行ったものである。執筆に際し, ご指導・ご助言を頂いた皆様, とりわけ愛知県埋蔵文化財調査センターのご理解とご協力に感謝の意を表したい。

（豊川市立三蔵寺小学校　教諭）